不幸な少女？

葵ヶ原 燈夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不幸な少女？

【Ｎコード】
Ｎ４３４９Ａ

【作者名】
葵ヶ原　燈夜

【あらすじ】
幼なじみと妹の陰謀という名の事故によって少女になってしまった美原眞人の悲劇。

薄倖な第1話：不幸の始まり（1）

「まこちゃ～ん、ちょっと来てぇ」
間延びした少女の声に、美原眞人は呼び出された。
「何かあったのか？　深雪。また何か、発明でも発見でもしたのか？」
華奢で半女性的な外見をした少年は、チョークの粉か何かで襟元を汚した幼馴染に問いかけた。
「そういうコトだよ。まこちゃんがチェスで忙しいのはわかっているけどさ、ボクとまこちゃんの仲じゃない。ね？」
「……はぁ」
近衛深雪という少女はこのような状態になってしまうと、梃でも動かない。それを知っている眞人は目の前のものを片付けながら、了解の返事と諦めの嘆きを乗せて言った。
「間違えるなよ、俺がやっているのは将棋だよ」

深雪が部長を勤めるのは科学部兼化学部。実験嗜好会という二つ名を持つ、噂の絶えない部活動であった。
現在、眞人と深雪の目の前にあったのは、実験室という表札の下に、黒いマジックで‘科（化）学部’と書かれた紙が張ってある、少し大きな教室であった。
「入るよ～」
深雪は声とともに、ドアを思い切り開け放つ。
部屋の中からは何も音はせず、何年も人の出入りがされていないかの如く、蛻の殻であった。
「誰もいないねぇ」
「そりゃあ、そうだろ。実質お前が部長、俺が副部長みたいなモンなんだから」

「でもね、知己ちゃん入ってるよ」
「知己が？」
深雪の言葉に驚く。
自分の妹である知己が、自分と同じ部活動に入っていたことは眞人は知らなかった。
「俺はそんなこと聞いていなかったけどな。あいつ、よく来るのか？」
「うん」
肯定の返事は二人の後ろから聞こえた。
「本当はね、中で待ってようとも思ったんだけど、ちょっと廊下で友達と話してたら思ったより時間たっててね、さき越されちゃったんだね」
後ろに立っていたのは眞人の一歳違いの兄妹、美原知己であった。
「お前、本当にこれの一員だったのか？」
知己が目の前にかけてきたので、顔を見てもう一度確認する。
「そうだよ。うちの学校、部活の副部長二人だから、あたしだって副部長だしね。それに深雪さんやお兄ちゃんが引退しちゃったら、あたしが部長になるんだよ？」
「でも、お前バレー部のレギュラーだとか。言ってなかったか？そんなやつが掛け持ちなんか出来んのか」
「いいのいいの。あそこはそういうの、気にしないし。ここなら絶対に検査でわからないような薬も手に入るしね。流石は科学部」
「知己ちゃんね、機械いじりに興味があるんだって」
スポーツマン精神に反するような発言をした妹の頭をはたこうとする眞人の手を、深雪は制しながら言う。
「かがくって言っても化け学じゃないほうの、だね。この間もね、ボクに絡繰りとか習いに来ていたんだよ。知己ちゃんが言ったのは冗談だよ」
「そーそー。あたしがドーピングとかすると思った？　やるわけないじゃん」

「ならそういうことを言うな。外に聞こえて本気にするやつがいたらどうする？」
「あははは、大丈夫、聞こえてないよ。ところで、深雪さん」
知己は突如として話を切り出した。
「お兄ちゃんに頼みたいこと、あったんでしょ」
「え？　そうだね、そろそろ始めようか。まこちゃん、お願いしていいかな」
「内容次第。ってか嫌だって言っても聞かないだろ、お前。だから、やるけどな。なんだよ、頼みって？　まだ聞いていないけど」
呆れと諦めの表情で隣の少女に内容を訊く。
「えっとね、新作機械の機動実験！　なんだけど……」
眞人は訝しむような表情を浮かべる。
「なぁ、それはお前か知己じゃできないのか？」
「ひっど～い。お兄ちゃん、あたしを売るの？」
知己は泪をぬぐうような動きをした。
「ボクは細かい作業を外部からしなくちゃいけないし、知己ちゃんじゃ危ないしね」
「なぜ俺なら危なくないと？」
「この前も、またその前も、死ななかったし……」
これまでに眞人は無邪気な幼馴染が作り出す、異形の機械や謎の薬の実験体にされたにもかかわらず、生還してきた。しかし、脱臼・骨折は当たり前、髪や体がいきなり紫色になってしまったこともあった。確かに死んではいないが、何度も死の恐怖を味わったことも事実だった。
「今回は死ぬかもしれないだろうが……」
「大丈夫！　もし死んじゃっても、人体甦生薬（男性用）ならここにあるから」
「世話になりたくないっての……　何の機械なんだよ今回は？」
「新しい全身マッサージ器。確実に体から凝りをなくす優れもの。その名も，こっくりさん，！」

「名前は兎も角、まともに動いてくれれば性能はすごいな。そうなってくれることを信じるしか、ないか」
「それじゃあ、お願いねぇ～」
眞人が動く前に、女子二人は実験用の小部屋に彼を押しこめる。
「おいっ、押すなって。……ったく。やりますよ。やらせていただきますよ」
しぶしぶ了解すると、今度は自分の意思で小部屋へ入った。

薄倖な第2話：不幸の始まり（2）

「まこちゃ～ん。そこにヒトみたいな、外面は木製みたいのが見えるでしょ？　それがこっくりさんだよ」

深雪の声に周りを見回すと、たしかに人のように見えなくもないモノがそこにはあった。ご丁寧に赤く‘こっくりさん’と書かれた名札まで付けてある。先程まで掛けてあったのか、赤いシートも近くに落ちている。眞人はそのシートについて少し気になった。今することを思い、忘れることにして前を見る。全身を見渡すと、小さな子供が見たら泣き出しそうな雰囲気が漂っていた。

「一応、あったみたいだけど、これからどうするんだ？」

「うん。こっくりさんの前に楽な姿勢で座って。胡座でも何でも。あ、でも正座はダメだよ？　正座はこっくりさんが身体が緊張してるって判断しちゃうみたいだからね。わかった？」

眞人は返事をせず、指示のとおり動く。謎の人形の前まで行くと、背を向け胡座をかく。

「これの前に座ったぞ。次は何するんだ？」

「もういいよ。そのまま楽にしてて」

嬉しそうな声色で、深雪は言う。よほど嬉しいのか、言葉にまで笑みが流れ込んでいるように聞こえる。後ろのほうでは知己までもが笑っているようだ。

「深雪？　何かあったのか、笑っているみたいだけど」

「いっくよー。せーのっ」

「おい、深雪……」

深雪は彼の問いには答えず、スイッチを入れた。

眞人に聞こえたのは、機械音。そして、金属の弾ける音だった。

目の前には白煙が広がった。

薄倖な第3話：不幸の始まり（3）

薄倖な第3話：不幸の始まり（3）

小さな実験室の大きな轟音が止んだ。

眞人が顔を覆うようにクロスしていた両腕を解き、目を開いた。

「ケホッ」

目を開くと同時に再開した呼吸は煙たい現場によってすぐに遮断されてしまう。それほどに煙漂う惨状だった。

「まこちゃ～ん、大丈夫？」

外からは状況が見えないかのように間延びする幼馴染の声。

「一応はな。何が起きたんだよ？」

妙に高くなってしまった声で眞人は問い返す。

「あのねぇ、こっくりさんが爆発自殺したみたい。まこちゃんが気に入らなかったのかな？　……あ、もしかして、こっくりさんの名札、赤くない？」

「あ？」

喉を押さえながら今まで一つの人形があった場所を探る。

何とか破片と化した名札を見つけだし、文字のところを見た。

「ああ、確かに赤いな」

「やっぱり？」

深雪は納得の声を上げる。

「赤い字のこっくりさんはね、女性専用なんだ。青いのは男性用で、黒いのが男女兼用。近くにあるはずだけど、ない？」

左右を見回す。

「……あった」

本体とともに半壊している赤字と黒字で書かれた名札があった。

「まぁ、とにかくこっち戻って来てよ。話してる分には今回も大丈夫みたいだけど、仮にも爆発の中心にいたんだよ？　ボクは医療知識もバッチリあるからさ」

「今回ばかりはそうさせてもらう。俺もだるい。つーか、身体が重い。喉に違和感もあるし」
眞人はズボンの裾を引きずりながらドアの方へと向かった。

「とりあえず、ここ座って」
部室へと戻った眞人は、知己の用意してくれたローラーの付いた椅子に腰掛けた。
「悪いな、知己」
好意に甘えていることを素直に感謝して、眞人は笑った。
知己はというと、彼を乗せたいすの特性を生かし、車椅子のように深雪がいるほうへと押して行く。
「まこちゃん。どこかおかしなところとか、ない？」
「さっきも言ったとおりだよ、喉が変な感じがする。上半身にも下半身にも違和感は歩けど、一番自分で感じる」
「うんうん」
自分の顔に出てしまう笑みを殺しながら、深雪はメモを取っている。慣れていないのだろう、抑えようとしても時折笑みはこぼれている。
「深雪……その笑い俺は大丈夫なんだと判断していいのか？」
「え？　うん、大丈夫みたいだね。でもとりあえず、寝ていたほうがいいかな。そこ、保健室から盗んできたベッドがあるけど、どうする、寝てる？」
小部屋があった方とは逆の、部屋の一角を指差しながら、深雪は聞いた。
「そうだな。悪い、そうさせてもらうわ」
椅子から降り、ベッドへあがった眞人は突っ伏した。そして、うつ伏。せのまま、寝入ったしまったため、残った二人は布団をか

けとてやった。
横たわる彼を見つめる二人の瞳は、妖しく光っていた。

日が傾きだした。
眞人が起きたとき、彼の前には幼馴染と妹の二人の顔が、相変わらずあった。
「目ぇ覚めた？　お兄ちゃん」
知己が先ほどよりも顔を近い位置に移動させ、また覗き込んでくる。
深雪は一歩後ろに下がり、知己にその場を譲っているようにも見えた。
「ああ……心配かけたな。もう大丈夫だよ。違和感はまだなんか残るけど、だるさは消えた」
「だったらさ、早速なんだけど、現状を把握してもらって、いいかな」
妹は、兄の無事に安堵の声を上げるより先に、そう言った。
「現状？　現状って何だよ。やっぱり俺ヤバイのか？」
心配になって妹の顔を見つめていると、彼女は左手で布団をはぎ、右手で眞人の利き腕である左手を取った。
「知己……？」
彼の左手を知己は彼の頬のすぐ横に触れさせる。
「え？」
何か糸のようなものに触れる感触があった。
「これって……」
間髪いれずに知己は彼の手を今度は彼の胸部に持ってくる。

「ふぇ？」
弾力あるものに触れる感覚、そして触れられるという今までにない感覚に眞人は襲われた。
それは髪の毛のようであった。
「えっ……えー！？」
「なんか、そうなっちゃったみたい」
「まこちゃん、可愛いから大丈夫だと思うよ」
洒落にならない二人の少女の励ましとともに、
「なんだよ、これ！？」
新米少女は叫びを上げた。

薄倖な第４話：不幸な新生活

「わ・た・し。まこちゃん、言ってみて」
「わた……し」
眞人は暢気な声に言われ、押され気味に言葉をつむいだ。
「違うよ、お兄ちゃん。もっとはっきり言わなきゃ」
「うぅ……」
事故で性別が反転してしまった彼女は、明日からのために、という名目で幼馴染と妹に少女講座を受けさせられていた。
「……何で、俺がこんなことやらなくちゃならないんだよ？　そもそも原因は深雪だろ。それに一人称のことなら深雪だってボクって言ってるだろ？」
「だとしても俺はちょっとおかしいよ。早く直してよね。明後日からは転校生の女の子として、同じ学校に通うんだから」
知らなかったことを聞かされ、眞人は目を丸くする。その顔は二人には可愛く映った。
「なんでだよ？　事故なんだから説すればいいだろ。俺……わたしは女の子を演じる自信なんて無いよ」
‘俺’というと二人に睨まれたため、自分の呼び名を直しながら現状を嘆いた。
「大丈夫。そのために今色々と教えているんでしょ」
「それに本当のことなんて言ったら、まこちゃん、変な噂立てられるかもよ。それでもいいの？　男の子に戻ったときにここにいられなくなっても」
「それは……嫌だな」
「ならここは美原眞人っていう男の子じゃなくて、別人の女の子を演じるの。元に戻ったときに、男のまこちゃんがここにいる。それならいいでしょ？」

「……ああ、わかったよ。やればいいんだろう？」
眞人はしぶしぶながら頷いた。
彼女の了解を聞き、深雪は知己のほうを向く。
「知己ちゃん、録れた？」
「うん、ばっちり」
知己は小型の機械を手に、笑いながら答える。
「なんだよ、どうしたんだ？」
「お兄ちゃん。いや、お姉ちゃん、今の答えは女の子教育を受講する意思も入ってたんだからね。自分で言ったからにはハードにいくよ」
「よかったよ、まこちゃんの同意を得られて」
「え……っと、知己さん、深雪さん、わたしには嵌められたように思うのですが、気のせいでしょうか？」
顔を青くして、今後の不幸を予測している少女に、二人の少女は同時に言った。
「そういうことになるね、頑張ってね」
眞人の顔はますます青くなる。
「今日は女の子の言葉遣いと、服の着方。そこからはじめようか」
「そうだね、まこちゃん、こっち来て。自分で言ったんだから、責任持ってよ」
週末の金曜日、一人の少女に自由な刻はなかった。

土曜日の朝、美原家の呼び鈴が鳴った。
「は～い」
無用心にも脈絡無くドアを開けたのは深雪。昨日からこの家に泊まりこみ眞人への教育を知己とともにしていた。
「こんにちは……ってあれ？」

「ありゃ、蛍ちゃん」
訪ねてきたのは波多野蛍。長髪が似合う、女子バレーボール部副キャプテン。眞人と深雪のクラスメイトであった。
近衛家は美原家とは隣同士であり、彼女の両親は現在不在である。そのこともあって、昔から美原兄妹には気を許しているところもあった。
「深雪さん、どうして？」
「ちょっとまこちゃんがね、忙しいみたいだったからボクが来たんだ」
さすがに今の眞人をすぐには見せられないのであろう、当人は出さずにそう弁解した。
「あれ、蛍先輩？」
深雪の後ろからひょっこりと知己が顔を出す。
「どうしました、私に何か用ですか？　それともお兄ちゃんにですか」
「お兄ちゃん？　あ、そっか。知己ちゃんって美原くんの」
蛍が掌を打ちながら返答をする。
「そうだよ、気が付かなかったの？」
「うん。部活の話は私のほうから知己ちゃんのトコロに行っているし」
苦いながらも元来話好きの蛍は笑う。
「そうそう、伝えないと。知己ちゃん、バレーの休日練習しばらくないの。知己ちゃんだけ電話番号わからなかったからね、部員名簿見たら、幸い私の家からも近かったし、直接来ちゃった」
「すみません、わざわざ。じゃあ、今日明日も無いんですよね。いつごろくらいまでですか？」
「えっと……確か月末くらいまでだったから、2週間くらいね。軽い自主トレくらいはやってよ？　体が怠けないように」
「先輩、それはわかっております」
口元に手を当て教える先輩に、敬礼をしながら後輩は答えた。

「それと……」
蛍は深雪のほうを向、神妙な面持ちで、尋ねた。
「美原くん、大丈夫なの？　放課後だるそうなのを見たけど」
「……」
動揺は隠せていたが深雪は息が詰まった。蛍に対しては背後にいる知己も同様だ。
「大丈夫だよ、まこちゃんには少し実験に付き合ってもらっただけ。今まで見たいに静止の淵を彷徨わせたりしてないよ」
深雪の言葉を聴き、少しだけ蛍の顔は青くなる。
「それって昔は彼、死にそうになったことあるってこと……？」
「そうですね。でもお兄ちゃんなら瀕死な状況に対して、免疫とかつけてそうですけど」
「そんなわけないでしょ。ちょっと本当に大丈夫なの？　彼と合わせてよ」
状況判断の天才とも称させるほどに仲裁と冷やかしが得意な知己にも、蛍のその発言は想像も付かなかった。
「で、でも先輩、先輩が思ってるほどお兄ちゃんが重症ってわけじゃあ……」
「なら大丈夫でしょ。会わせて」
知己はどうして外出してるなどの言い訳をしなかったのか後悔した。
「ぁ……ぅ」
見事なほどのタイミングの悪さで、疲れきった表情の眞人が蛍から見える位置に出てきた。
「誰……知己ちゃんのお姉さん？」
「あれ……波多野さん……？」
今度は言ってしまった後悔を眞人が味わうこととなった。

美原家の食事等テーブルには、四人の少女が座っていた。
「どういうことなのか、しっかりと説明してください」
西側に座っていた蛍が切り出す。
「えっとねぇ、新しい機械の事故でまこちゃんが女の子になっちゃった。としか説明できないけど」
「納得できますか！　そんなあ非現実な話」
深雪が答えるも聞き入れられない。
キャッチャーとバッターで行うキャッチボールのように成り立たない。
「本当のことなんだよ、認めたくないけど」
顔立ちなどには面影を残している眞人が口を挟む。
「美原くんに似てはいますけど、親戚か何かでしょう？」
疑念のこもった問いに、眞人も顔を曇らせる。
「じゃあ先輩、お兄ちゃんと何か秘密の共有なんかしてませんしてるんだったらそれを言ってもらえば」
？
知己の提案を蛍は呑むが、
「でも、波多野さんと俺はもともとそんなに親しくないし……」
「そうだ」
困り果てている眞人を前に、蛍は思いついたように言う。
「私の親戚の男の子の名前。あの子の名前を答えてくれたら信じる」
蛍の言葉に眞人はひとつの出来事を思い出した。
二ヶ月ほど前、小旅行中に偶然彼女と逢ったこと。そしてそのとき、彼女が幼い少年を連れていたことを。
「確か……いつき……くん？」

「……正解」
蛍は驚いた顔をした後、もう一段階上の驚愕の表情をした。
「本当に……美原くん。美原眞人くん？」
「そうだよ。はぁ、クラスの誰にも、知られたくなかったんだけど」
眞人は嘆息する。
「大丈夫だよ、まこちゃん。蛍ちゃんは人の秘密を暴露するような人じゃないから。ね、蛍ちゃん」
「ええ」
「でも先輩、よくたった一個の答えで信じましたね。あんなに疑ってたのに」
知己がひとつの疑問を口にする。
「ああ、あの子は遠くに住んでる子でね、この近くで逢ったのは美原くんだけだったし」
「お兄ちゃんが誰かに言ったとかは？」
「人に言っても意味無いことだし、それに、美原くんなら言わないでしょ、ね？」
「うん……それで波多野さん、俺のこと、誰にも言わないでください」
微笑みながら自分を信じる蛍に嬉しさを感じたが、眞人にとって重要なのは自分の正体についてであった。
「それは安心して。誰にも言わない。そのほうがいいんでしょ、深雪さん？」
「うん、そうしてもらったほうがいいな」
そこまで言うと深雪は蛍に近づき、耳元に口をまた近づける。
「後々、同じ情報が伝わると思うけど、蛍ちゃん気にしないでね」
深雪は小声で言った。
「え？　それってどういう……」
「あっ、そうだ！」

蛍が聞き返すのをさえぎるように知己が叫ぶ。
「深雪さん、先輩にも協力してもらいません？　お兄ちゃんの教育」
「そうだね。それ、いいかも。どう？　蛍ちゃん」
「げ……」
知己の提案、深雪の同意、眞人の呻きが同時に上がる。
「教育って？」
「まこちゃんが女の子として暮らすための教育」
深雪は笑って答える。
「わ、私は遠慮しておきます。用事もあるので」
「そう、残念」
深雪の知己の二人は、参加者が増えなかったことに多少の不満があるような顔をした。眞人のほうも「何でもいいから助けてくれ」という気持ちがにじみ出ている表情をしていたが、蛍は気づかないようにした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4349a/

不幸な少女？

2010年10月17日03時13分発行